

名 称	新居町体験活動ボランティア活動支援センター
所 在 地	〒431-0303 静岡県浜名郡新居町浜名519-1
連 絡 先	TEL : 053-594-8117 FAX : 053-594-8120

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 新居町 17,536人

新居町は静岡県の西部にあり、浜名湖の南西に位置している。古くは慶長5年（1600年）に徳川家康によって今切関所が設置され、「入鉄砲・出女」など通行する旅人を厳しく取り締まっていた。関所の面番所は全国で唯一江戸時代の建物が現存しているもので、貴重な文化財であるとともに町のシンボリックな存在となっている。また東海道五十三次の宿場町としても栄えてきたが、現在でも東海道新幹線や東海道本線、国道1号線が町を東西に横切っていて、東西の交通の要衝となっている。

町の中心部は今でも宿場町の頃に作られた路地で分けられ、コミュニティが形成されている。子どもたちも町中で祭りや地域の行事などの様々な機会を通じて大人たちと触れ合いながら生活している。しかし最近の核家族化や少子化、中心部から郊外へ転居する世帯の増加などにより、以前と比べると大人たちとの触れ合いや異世代との交流体験の機会は減少していると思われる。また休日の過ごし方が多様化している中で、地域で行われる行事の数や参加者数も減少しつつある。

事業の名称、活動概要

名称 新居町青少年ボランティア「助っ人」

当町の青少年ボランティア事業は、高校生を中心とする登録制のボランティアと小・中学生を対象として夏休み中に行うボランティア体験講座の二本立てで実施している。

高校生を中心とする登録制ボランティアは町内の中学校の卒業生や県立新居高等学校の1・2年生を対象にチラシを配布し、募集を行っている。登録者には当支援センターからボランティア活動予定表が送付され、登録者がその中から参加を希望するものを選んで活動するという形で行っている。また、夏休み中に行う小・中学生のボランティア体験講座は当支援センター発行の生涯学習情報紙を通じて1学期末に募集を行い、申込者が事業や日を選んで参加するという形で行っている。

主な活動は町教育委員会が行う事業や町内の福祉団体、子育て支援を行っているNPO

法人などの事業に参加し、サポートすることである。

事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

当町の子どもたちは中学校を卒業すると町内にある県立新居高等学校のほかに隣接する浜松市や湖西市の高等学校へと分かれて進学していく。それまでは子ども会活動や祭典などの地域行事への参加を通じて地域とのつながりが密接だった子どもたちも、進学先が町内外へと分かれば、地域の活動に参加する機会が少なくなることによって、地域社会への帰属意識が徐々に希薄になっていく。そこでこれら高校生世代の青少年に町内でのボランティア活動の場を設定することによって、自分たちが生まれ育った地域社会への愛着と地域に貢献しようとする意識を高めるとともに、他者から認められる喜びを感じさせ、自らの生き方に自信を持たせる機会にしたいと考え、新居中学校や県立新居高等学校の協力を得て高校生世代対象の登録制ボランティア事業を実施してきた。

また、小・中学生の世代から地域に貢献する喜びを体験するとともに、早い段階から高校生ボランティアの存在を知り、将来の参加意欲を高めていくために、新居小学校、新居中学校の協力を得て小・中学生を対象とした期間限定（夏季休業中）のボランティア体験講座を実施してきた。

事業の内容

① 事前準備として行った取組（企画段階）

当町の青少年ボランティア事業は始まって約10年が経過しようとしているが、毎年継続して実施するために新居小・中学校、県立新居高等学校に対して参加・登録者募集への協力や児童・生徒の参加について理解・配慮をお願いしている。

ボランティア活動の対象となる事業については、教育委員会事務局内の各係と支援センター担当職員が連絡を取り合ったり、町内の福祉団体やNPO法人と連絡を取り合ったりして、ボランティアを活かすことができる事業について情報交換を行い、なるべく多くの活動機会を設定できるようにしてきた。

② 活動の展開内容（活動段階）

高校生を中心とする登録制ボランティアの活動の流れは次のとおりである。

- (1) 季節ごとに支援センターから送られてくる「ボランティア活動予定表」の中から自分の希望やスケジュールに合わせて参加できるものを選び、「参加希望調査票」に記入して提出する。
- (2) 支援センターはそれを取りまとめ、参加を希望した高校生に希望事業の詳細な実施日

時、場所、持ち物、注意事項などについての連絡を発送する。

(3) 受け取った高校生はそれに従って活動に参加する。

小・中学生を対象とするボランティア講座についても高校生と同様に、参加希望を提出し、支援センターからの連絡に従って活動に参加するという方式を執っている。ただし、小・中学生は高校生に比べるとボランティアに対する意識や活動に取り組む態度がまだ十分成熟しているとは言えないため、事前指導を十分に受けた上で活動に参加するようにしている。

なお、活動の具体的な様子については次のとおりである。

○教育委員会主催講座のサポート

教育委員会が主催する小学生向けの講座に参加し、指導者の側に立って活動を支援した。講座運営のサポートや子どもたちの安全確保のために目を配ったり、準備や片付けを手伝ったりした。

子どもと一緒に活動に参加する中で子どもとの触れ合い体験の場となったほか、参加者自身も自然体験や文化体験を積むことができ、郷土の良さを再発見する機会にもなったと思われる。



○「新居町歴史ボランティア」

新居関所史料館特別展の監視員のほか関所周辺からの出土品の水洗いや大きさの計測、町で保存している古文書の整理・分類、明治・大正期に使われていた古民具の大きさの計測やデジタルカメラでの記録撮影などを行った。ボランティアに参加した子どもたちは、自分の住んでいる新居町は関所の町だということは知っていても、地中に埋まっていた昔の陶器や瓦の破片、江戸時代に書かれた古文書に触れる機会はほとんどなく、単なるボランティアの域を超えた貴重な歴史体験になったものと思われる。



○「つみきで遊ぼう」

つみき遊びを通じて親子の触れ合いの場を提供しようという町内のNPO法人と連携し、その事業に中学・高校生のボランティアが参加できるように活動の場を設けた。このボランティアは、参加した親子に進んで声を掛けるなどの働きかけを行って、楽しくつみき遊びができる雰囲気づくりをしていかなければならないため、他のボランティアと比べると難しい点もある。しかし前年のボランティア参加者が今年も引き続き参加を希望するなど、リピーターも多いことから、やりがいが大きく、得るものも多いボランティアであると考えられる。



③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

本事業を実施するに当たっては、町内の小・中・高等学校や福祉団体、NPO法人などとの連携を大切にしてきた。今日の学校は子どもも先生方も大変忙しく余裕がないため、学校と連携するに当たっては学校の教育課程に影響を与えたり、先生方に過度な負担が及んだりすることがないように配慮してきた。ただし学校外で児童・生徒が行ってきたボランティア活動や、活動中に見られた良い表れについてはぜひ先生方にも伝えたいと考え、児童・生徒の取り組みの様子を町の生涯学習広報紙で取り上げ、紹介した。また、ボランティアに協力していただいたNPO法人から活動中の児童・生徒の様子がわかる写真や活動を終えての参加者の感想をクリアブックに綴じてまとめたものを提供していただいたため、そのクリアブックを学校へ届け、担任の先生を通じて参加者に渡していただくように学校にお願いした。児童・生徒の学校外での活動の様子や良い表れが学校に伝わることによって先生方の事業への理解が進み、地域と学校が連携した人づくりが進められるものと考えた。

事業の成果と今後の課題

本事業を通じて中学校卒業とともに地域とのつながりが少なくなりがちな青少年が地域の幅広い年代の人たちと共に活動する中で、互いに良い関係を築き、地域の大人から認められる喜びや地域のために役立つ喜びを実感できる機会とすることができた。

また学校と連携して事業を実施し、その中で見られた参加者の良い表れを学校に伝えることによって、社会教育やボランティア事業に対する先生方の理解が進み、学校と協力して取り組んでいく体制の基礎を築くことができた。

今後の課題の一つはボランティアの参加登録者に減少傾向が見られることである。多くの高校生は部活動に所属していて休日も練習や試合で忙しかったり、学業に集中していたりして、なかなかボランティアに参加する時間的余裕がないようである。「学業や仕事、

部活動など、自分たちの本分をおろそかにしてまで参加する必要はなく、自分のスケジュールに合わせて参加できる範囲でかまわない。」と呼び掛け、参加しやすい雰囲気をつくるように努めてきたが、今後もこのスタンスを継続して自分のスケジュールに無理のない範囲内での参加を呼び掛けていく。また、小・中学生の段階でのボランティア講座を更に充実させ、ボランティア活動に参加する喜びややりがいをより早い時期に体験できるようにして、参加意欲を高めることができるようにしていきたい。

もう一つの課題は財政的に厳しい中で支援センターの事業規模をいかに維持していくかということである。放課後子ども教室など新たな事業が増えてくる一方で町の職員数は削減される傾向にあり、職員一人当たりの事務分掌は確実に増える方向にある。また県教育委員会から町に派遣されてきた社会教育専門員も、制度の見直しに伴い小規模な町ではその継続が困難になっている。地域と学校が連携した活動をコーディネートしたり、地域の人材・素材を生かして学校の教育活動を支援できる体制をいかに継続していくかを考えていく必要がある。

執筆者職・氏名：新居町教育委員会事務局主任（社会教育専門員） 高須 昌直

コーディネーターからの一言コメント

高校生をボランティアスタッフとして育成する目的とその方法、そしてクリアブックを通しての学校との連携のあり方などがとても良い。教員の理解は高校生にとって大きいと考える。リピーターは企画段階から参加できないか。

（橋本 洋光）